

朝日選書  
68



渡辺一民

フランス文壇史

渡辺一民著

フランス文壇史

朝日選書 68

渡辺一民<わたなべ・かずたみ>

1932年(昭7)東京生まれ 東京  
大学卒, 仏文学専攻。立教大学  
教授。

著書に『神話への反抗』(思潮  
社), 『文化革命と知識人』(第  
三文明社), 『ドレーフェス事  
件』(筑摩書房)他。訳書に『ア  
ポリネール全集』(紀伊國屋書  
店, 共編訳), ミシェル・フー  
コー『言物と物』(新潮社, 共  
訳) などがある。

フランス文壇史

朝日選書 68

1976年8月20日 1刷発行

定価 760 円



著 者 渡 辺 一 民

発 行 者 角 田 秀 雄

発 行 所 東京・名古屋 朝日新聞社  
大阪・北九州

〒100 東京都千代田区有楽町 2-6-1  
03(212)0131(代) 振替東京 0-1730

印刷所 凸版印刷株式会社

© K. Watanabe 1976/装幀・多田 進

0336-259168-0042

## まえがき

わたしがこの書物で書こうとしたのは、大革命以後第二次大戦までのフランスにおいて、さまざまな文学作品を成立させた《場》というものについてなのである。いちおう便宜的に全体を『フランス文壇史』と名づけたが、正しくは位相を異にする十七の特徴的なそうした《場》についてのエッセーを時代順にならべたのがこの書物なのだ。したがってわたしの関心の焦点となりつづけたその《場》というものについて、ここでいささか説明しておく必要があるだろう。

わたしが文学作品を成立させた《場》と言うとき、その《場》とは、作者に協力して文学作品を成立させたもの、それなしに作品が誕生しえなかったもののことである。だからそれをかりに《文化》とよんでもさしつかえない。それは大きくわけて二つの異なった部分からなる。ひとつは、それぞれの時代の知的世界とでもいおうか、その時代の文学作品ばかりではなく思想や芸術や科学などのあらゆる知的生産物、さらにその時代が興味を寄せる過去の知的遺産や他の文化圏の知的生産物によってつくりだされるものであって、それを肯定するにせよ否定するにせよ、その時代のなかで知的活動を

おこなう以上、だれしもその影響を免れえぬものことだ。もうひとつは、ふつう社会とよばれる現実世界の動向であって、これもまた、作者の意志にかかわりなく彼を束縛し、時代の刻印を彼のうちに残していくものにほかならぬ。このような二つの要素がからみあって生みだされる《場》というのが前提としてはじめて、作者には、そのうえにみずからの個性にしたがって作品を開花せしめることが可能となる。しかもそうした《場》が、みずから積極的にその実現にかかわった作品を、最後には作品として認知する検閲官の役割をもはたすことを忘れてはならない。

作品を作品たらしめる不可欠の存在は読者であろう。読者のいない作品は作品とは言えない。しかも近代において作品が読者を獲得するためには、それが印刷されなければならぬ。こうして、創造の過程において作者に協力した《場》としての《文化》は、こんどは立場を代えて出版者をみずからの代弁者として創造されたもののまゑに立ちはだかる。出版者はすくなくとも読者の見いだしえぬ、あるいは見いだしえぬと思う作品を出版することはできないからだ。したがってどのようなすぐれた作品であっても、出版者を見つけないければ作品とはなりえない。むろん、自費出版ということはあろうけれどもそれはきわめて稀なことだ。かつてスタンダールが『赤と黒』を世に問うたとき、この書は半世紀のちにしか理解されまいと語り、じじつ『赤と黒』が高く評価されたのは一八八〇年代のことだったが、それでもこの作品は一八三〇年にルヴァヴァースールという出版者を見いだすことができたのである。ルヴァヴァースールがいなければ、『赤と黒』は一八八〇年代に再評価されるどころか、作

品として存在することすらできなかったかもしれない。作品は《文化》と言いうるその時代の文学の《場》の承認なしには、誕生することすらできない。そうした意味で、死後出版の作品は、むしろその出版された時代の《文化》に属するものである。

このように個々の文学作品を成立させるとともに、その文学作品をみずからの秩序のうちに組みこんでいくそれぞれの時代の《場》としての《文化》というものは、だから一般に想像されているよりもはるかに色濃く個々の作品のうえに影を落しているのだ。見方をかえれば、すべての知的生産物は、ある期間持続して層をなしていく、こうしたそれぞれの《場》の所産であって、作品というものはそういう《場》としての《文化》の指標だと言いうこともできるであろう。したがって《場》を理解することをつうじて、われわれは容易に、そうした無数の《場》のつみかさなった、より大きな、たとえばフランス文化とかヨーロッパ文化といった、文化総体にかかわっていくことも可能なはずなのである。

あるいは、わたしがフランス文学の《場》というものに関心をいだくようになったのも、それがわれわれの文化とは本質的に異なった外国のものだったからかもしれない。しかしすくなくとも、そういう《場》を理解するとき、無味乾燥な文学史の知識では納得しえぬさまざまな事柄が明確となり、そのような《場》のうえて個々の作品が有機的につながりあって、ひとつの文学の富をあぎやかに浮かびあがらせてくれる事実是否定できない。八年まえ、中央公論社の『世界の文学』の月報に収録作

品をめぐる逸話のようなものをしばらく書いてみないかと言われたとき、それぞれの作品の成立した《場》について書いてみようと思いついたのも、こうした日ごろの関心のせいにほかならなかった。ついでにつけ加えておけば、この『フランス文壇史』は、月報の連載のおわったあと、あらためて大革命から第二次大戦までの《場》をふりかえり、さらにいく章かを書きくわえて完成させたものである。

もうひとつ、わたしがなぜ大革命から第二次大戦までというふうに、この書物の時代を限定したか記しておきたい。

それはまず、フランス大革命を境に《文化》の性格が根底から大きく変更させられた、いいかえれば、文学者というものが大きく変貌をとげたこととわたしが考えるからだ。簡単にいえば、大革命までの文学者のおおくは年金や献辞料で暮らす王侯貴族の寄食者であって、作品はサロンにどう王侯貴族の承認さえ得ればつに活字とならなくとも作品でありえた。社会の代弁者としての出版者と契約をかわすわれわれの想像するような文学者は、じつに大革命以後はじめて誕生したのである。大革命を軸とするこうした文化の大変動に見あうものを、わたしは第二次大戦後に見ている。最近のその変動によって文学の世界がどのように変化したか、ここはその問題を論ずる場ではないが、すくなくとも戦後の大衆社会の成立が、バルザック以来のひとつの文化のありようを大きく変えざるをえなかったと言うことはできるであろう。わたしがこの『文壇史』を、「ナポレオン時代」ではじめて「一九三六年夏」でいちおう終止符を打った所以である。

この書物が『フランス文壇史』と簡稱しながら、ここに登場しないあまりにもおおくの有名作家があることも、とうぜん触れられるべきすくなくぬ挿話が無視されていることも、わたし自身知らないわけではない。むしろそれはわたしの浅学にもよろうが、同時にそれが、何よりも近代フランスの文学作品の成立する《場》を描き出すというわたしの初心をつらぬくための結果でもあったことを、やはり一言弁解しておきたい。あえていえば、文学作品をまえにしての読者の自由な想像力をさらに豊かなものとすることができればと希いつつ、故意に作品そのものに触れず、わたしはわたしなりに理解してきた文学作品の成立する《場》についてのこれらのエッセーを書いたのである。

この『フランス文壇史』が刊行されるまでには、最初に月報への連載をすすめてくださった中央公論社『世界の文学』編集の方々をはじめ、その後統篇のために誌面を提供してくださった『世界』、『文学』、『すばる』、筑摩書房の『世界文学大系』などの編集部の方々、はやくからこの書物を企画して終始わたしを励ましてくださった朝日新聞社図書編集室の及川武宜氏、本にするにあたっているいろいろな面倒をおかけしたおなじ図書編集室の古田清二氏など、おおくの人々のお世話になった。ここにあらためて感謝の意を表しておきたい。

一九七六年六月

渡辺 一民

フランス文壇史目次

まえがき

ナポレオン時代 3

一八三〇年、または文学者の誕生 15

東方の誘惑 26

二月革命、または科学の信仰 37

二つの文学裁判 51

印象派時代 64

ローマ街八十九番地 75

ドレーフユス事件、またはサロンの栄光と悲惨 87

《ベル・エポック》、または女性の時代 99

月世界旅行 111

モンマルトルの丘 123

クレテューの《僧院》 141

『NRF』 155

《アプレゲール》の青年、またはダダ体験 166

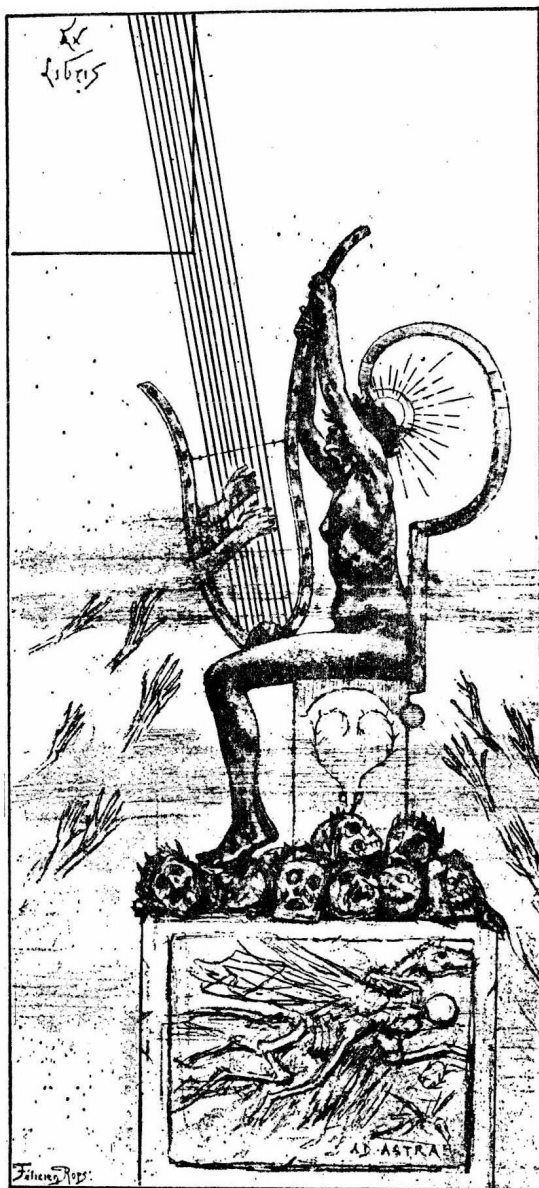
高等師範学校 180

パリの外国人、または文学共和国の幻影 193

一九三六年夏 205

フランス文壇史

xx  
libris



## ナポレオン時代

ナポレオン・ボナパルト——その名はわたしのうちにさまざまなイメージを呼びさまさずにはおかない。子供のころ雑誌の口絵かなにかで眼にふれた、マントをふりはらい右手で進軍の合図をするアルプス越えの馬上のナポレオンの勇姿、雪のなかで燃えあがるモスクワの街角にたたずむ三角帽子のナポレオンのシルエット、そして読書をつうじてわたしのものとなった、ヴェリエールの製材所でジュリアン・ソレルの夢みるナポレオン、『根こそぎにされた人々』のステュレルがアンヴァリードのその寝棺のまえで六人の仲間にあっけい口調で描き出すナポレオン、『征服者』のガリーヌが広東革命に身を投ずるまで手放さなかったラス・カーズの『セントロヘレナ聞書』の行間にうかぶナポレオ

ン——それらのおびただしいナポレオンの姿は、いまさらのようにフランスの精神の流れのなかにおける、その測りしれぬ大きさを思いおこさせてくれるのである。そしてわたしは、スタンダールからゴビノー、バレスを経てマルローにいたる、ナポレオン文学の系譜といったものさえたどりたくなくなってしまう。

けれども不思議なことに、そうしたナポレオンがフランスに君臨した時代、大革命から王政復古にいたる時期のフランス文学というものは、ナポレオンの偉大さとはまさに対照的に不毛なものと見えるのだ。大革命直前のわずか七年間にも、『危険な関係』『フィガロの結婚』『ポールとヴィルジニー』といった傑作が生みだされてはいる。しかし一七八九年から一八一五年までの二十六年間に、いったいこれら三つの作品と比肩しうるどれだけの傑作が世におくられただろうか。『アタラ』『ルネ』『オーベルマン』『コリーヌ』『アドルフ』と算え<sup>かぞ</sup>あげてきて、たちまちだれしも詰まってしまうにちがいない。しかも厳密にいえば、『アドルフ』の刊行は一八一六年のことだ。このおおいがたい不毛もまた、ナポレオンという強烈な個性の存在と無縁とはいいきれまい。

もっとも、このような現象をいくつかの社会的要因からいちおう説明することは可能であろう。まず大革命にはじまる大動乱によって、たとえばアンドレ・シェニエのような時代を代表しうるすくなくからぬ文学者が命を失い、あるいは国外に亡命したこと。従来の文壇を構成していたアカデミーやサロンや社交界が、おなじような理由から崩壊したこと。それにともない「文学をする」ことに生涯を



ダヴィッド『アルプス越えのナポレオン』（1800年）

捧げようとする考え方が失われたこと。そのうえ、動乱期にはつきものの検閲、発禁、情報統制といった言論の自由の制限が大規模に、しかも組織だっておこなわれたこと。なるほどこれらの理由から、この時代にひろくもてはやされた文学作品が、外を吹きあれる嵐とは縁もゆかりもない、気のぬけた古典主義の遺物にすぎなかった事実はあきらかにされよう。だがナポレオンの存在が脳裡にとどまる以上、それだけでは納得しえぬ何ものかが残されるのもまた否定できぬことなのだ。

この時代の文学は不毛だとわたしは断定した。とはいえその不毛のなかにあって、作品の数こそわずかだが、三人の文学者の存在がひときわたかくぬきん出て、この時代の文学を特徴づけていることを見逃してはなるまい。スタール夫人、バンジャマン・コンスタン、シャトーブリアンである。しかもこの三人は、ナポレオンとおおくの共通点をもっているところにその独特な性格があるのだ。

第一に、ナポレオンも含めて彼らは四人とも一七六六年から六九年にかけて生まれているのであって、ティボーデはこれを「一七八九年に二十歳であった世代」と総称する。第二に、四人とも純粋なフランス人ではない。スタール夫人はジュネーヴの生まれであり、コンスタンはローザンヌ、ナポレオンはコルシカ、そしてシャトーブリアンはブルターニュだが、ブルターニュ地方のフランス国内における特殊な地位、さらに彼が若くしてアメリカへ渡ったことを斟酌するならば、他の三人とおなじように異国者だったと言うことができるであろう。そして最後に、その後の立場のちがいがあ

よ、彼らがひとしく大革命にたいして共感をおぼえた過去をもつ事実をあげなければならぬ。当時すでにスウェーデン大使に嫁<sup>と</sup>いでいたスタール夫人は八九年に革命にたいする熱烈な讃辞をあきらかにし、テルミドールの反動期のさなかにあってもコンスタンは友人に「ロベスピエールのために祈ろう」と書きおくり、王党派のシャトーブリアンさえのちに「革命初期の混乱の底にあった一般的感情はわたしの強い独立心に共鳴したのだ」と記している。ナポレオンがジャコバン党の将校だったことはあらためて指摘するまでもなからう。

こうしてみれば、たしかに彼らはナポレオンとともに「一七八九年に二十歳であった世代」なのであって、あらゆる意味で一種の精神的同族関係でたがいに結ばれていたと言わなければならない。けれども、こうした三人の文学者の生の軌跡をいまいちどふりかえてみると、それがおなじ文学者といっても、ラシーヌのそれとも、バルザックのそれとも、本質的に異なったものである事実にだれしも気づくにちがいない。言いかえれば、はたして彼らは文学者だったのかどうかという疑問に、われわれは突きあたらざるをえないのだ。

たとえばバンジャマン・コンスタンに例をとろう。

コンスタンは一七九四年スタール夫人を知り、翌九五年五月、執政官政府下のパリへ夫人とともに出てくる。そして九六年『フランス現政府の力とそれへの加盟の必要』を發表して、過激にはしるこ